
NERVOUS NOVEMBER

- 月下草シリーズ08 -

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NERVOUS NOVEMBER - 月下草シリーズ08 -

【Nコード】

N7612C

【作者名】

秀

【あらすじ】

『11月』になると繰り返される悪夢。そして繰り返す記憶。傷ついた心。『癒し』はその解答になりうるのか？月下草シリーズの一つの結末。登場人物は三山斎（S）、菅田千尋（K）、立花美子（M）、空木秋晴（S）。並んだ順番に読んでもいいし、その人だけを追って読んでも構いません。

Sの場合（前書き）

この話は、「月下草」シリーズの終わりではありませんが、結末の一つです。内容的に『夢』と『過去の記憶』と『現在の思い』が混在しています。でもあまり悩まずに読んでみてください。

Sの場合

最近寝覚めがやけに不快だ。

実際には何も異変などこの身体に起こってなどいないのに、全身にまつわりつくようなねっとりした倦怠感。そして吐き捨てたいほどの嫌悪感。

分かっている。本当は。これを解らないと言えるほどかまとぶれない。

だから、今夜こそ確かめようと思う。

夢を操るなんて日常茶飯事の私を、ここまで弄ろうつてもの知らずを確かめるのだ。

*

夢の中で意識を取り戻した。そして状況を認識し、確認する。

場所はよく分らない。薄ぼんやりした、無機質な部屋のようだ。やたら広くてうすら汚い。こんな場所に見覚えはない。生あたたかくて、肌に湿っぽい。

部屋には私と、あと二人の女がいた。見覚えがない。ただ、薄ぼんやりした記憶を手繰ってみると、彼女たちは私と一緒に、ここに無理矢理連れて来られていたのだ。

目を上げると、やたらただ広い部屋の向こうに、『不快』の影。

ああ、そうか。

私は彼女たちと一緒に連れて来られたのだ。

『不快』が好色な嘲いをつくる。のっそり上げたその腕が、指が、私たちを誘う仕草に動く。

だって、『彼』にとって私たちは、『玩具^{おもちゃ}』なんだから、なんだ

そうだ。

不快で、不愉快で、吐き気がするほど目の前の『男』が気色悪い。牝を眺める牡の表情が、いつそ獣のものであればまだしもかもしれないのに。

誘いに応じて、傍らの女たちがもそもそと動いてそいつへと近付いていく。その様子ににたりと半開きの唇を歪ませる『そいつ』。そのだらしなく笑みに見開かれた眼が黄濁したケダモノのそれに見える。内腑の辺りで何かがせり上がるような感覚を覚える。

意識は今すぐにも逃げ出したいと訴えているのに、身体の筋肉を脳が動かそうとしない。まるで金縛りにあっているときのように、ただ胸の辺りがむかむかする。

ただ広い部屋の向こう側で、『玩具』に戯れかかりまぐわいあう『不快な獣』。一人は無表情に、一人は無邪気に相手を受け入れる。無邪気な女は無邪気すぎて、それが不快なのか嗜虐心を煽るのか犯されているようで、それでも女は笑っている。

それに飽きたら、次は私の番？

逃げればいい。逃げる隙はたくさんある。でもここから動かないのはどうやら私の意志らしい。身体が鉛のように重い。好奇心が見てみたいという。不可解だ。

馬鹿な行動と認識して馬鹿をやっている自分を肯定しつつある。これは別の表現で「期待」とでもいうものなのか？

不意に私の足下へ滑り込んでくる女。

シヨウコさん がふざけたように派手に私の方へ跳び込んで。思わず飛び退って避けた私を、裏腹に冷静に見上げてくる視線。或いは軽蔑の。

シヨウコさん ? 逃げろって? 跳べるだろうって?
冷静な、諷める視線。或いは咎めるものだったのか?
いずれにせよ、私の呪縛を解いたのはその視線。

身体は軽かった。

もう一度、跳んで、そのまま後も振り返らず駆け出していた。

《ただ逃げないというだけのおもいなら、心も動かされない光景にも情景にも足を止める価値などお前は持ち合わせていないだろう?》

いつまでも冷たい視線が私をそう責め立てている。

は、と目が醒めた。やたらと爽快な目覚め感に、酷い嫌悪を覚える。

何という夢を見るのだ、私は。知らない。誰も、知らない。不快な男も、不愉快な女も。井子^{ショウコ}さんはどうして井子さんなのだろう? 夢の中の自分の不可解な思考回路にも辟易する。それなのにやたらと目醒めがいいのは不愉快を通り越して薄ら寒い。

腕を伸ばして枕元の時計を引き摺り寄せる。「12:13」まだまだ30分はゆくに寝ていられる。肩からずり落ち気味の布団を頭まで引き被って、もう一度と瞼を閉じる。

願わくば、次に目覚めたときにはこの明け初めの夢など記憶から抹消されていますように。

「!?!」

ひどい痛みに目が醒めた。目の前の時計の表示は「5:44」。薄明るくぼやけた視界と、いきなり覚醒させられた身体。腹に感じ

る鈍く重い疼痛に、思わずぎゅうつと眼を瞑って腹を抱え、身体を折り曲げる。ぎゅうつと。出来得る限りに身体を小さく小さく縮こまらせて。

ああ、出血しているのかも

腹筋に力を入れてみると、少しは痛みが紛れたような気がする。

ああ、何か出ていつているような気がする

ずるぬると何かが腹の中から体外へ出ていく感覚を、無感動に享受する。

このまま、内腑全て出ていつてくれないかしら

そうすれば、あんな夢を見てあんな思いしなくてすむかもしれない。
い。

そうやって、

耳のすぐ側で私じゃない声が聴こえた。私じゃない。井子、ショウコだ。

否定するんだ。全てを

今度こそ、本当に私は覚醒した。

微かに震える腕が半身起こした身体を支えている。

心臓がばくばく躍っていて、もしかして心臓麻痺を起こして死ぬときってこんな感じなのかなあなんて頭の片隅で呟いてみる。

でもこの最悪な目醒めが、かえって私を安堵させる。これぐらいの報いは必要だろう。私には。

ずるずると布団の上を引き寄せた時計の表示は「6:29」認識すると同時に目覚ましのベルが鳴る。コンマ5秒でそれを止め、私はようやく本当に一日をスタートさせる目覚めを手に入れた。

三山斎（サイさん）の場合

Kの場合

夜の闇に蝶が舞っていた。

盲のように、狂えるように、羽ばたくその姿は、どこか恐ろしく、けれども美しかった。

困ったなあ。

心底そう思いながら、俺は目の前の彼女を見る。泣き腫らした目に荒んだ雰囲気。先ほどまで喚いていた口は今は歪んだまま引き結ばれて、時折すすり上げる息の音とため息のような大きな呼吸音だけが漏れていた。

この人とは付き合い始めてもうすぐ3ヶ月になろうかというくらいだったが、初めて見る形相であり、初めて聞く罵声であった。

「どうして何も言わないのよ」

しばらくぶりの嗚咽以外の言葉は、俺にとってはやはり理不尽という以外ないもので、俺はやはり何も答えられず、一旦開きかけた口を閉ざす。

「どうして何にも言わないのよ！そうよ、どうせあなたは何も言わないのよ。何も考えてないんだものね、あたしのことなんか！」

どうやら何も返事がなかったことが彼女にとって気に喰わなかったらしく、喰ってかかるようにまくしたてられる。

困ったなあ。何度目か分からない慨嘆を胸中でこぼす。もはや慰めようという気も萎えている。弁解するべきなのかもしれないが、一体何を言えいいのか分からない。そもそも彼女は一体何をそんなに怒っているのか、それすら俺にははつきり分かっていない。

ただ、これがいつものパターンであるということは確かなことだった。

彼女との関係において、に限らない。女性と付き合うとだいたいいつ頃からかこういう状況に陥る。しかしいつも俺にはそんなときの彼女たちのことが理解できないのだ。一体俺が彼女たちに何をして機嫌を損ねたものやら、何を彼女たちにすれば満足してくれるのやら。ただ、こういう状況に陥る頃の俺はひどく疲れているということは確かなことであつた。

「聞いてないでしょ、あたしの言ってること！」

ばん、と派手な音がして俺は目を上げた。いつの間にやら俯いていたらしい。見ると彼女は机に両の掌を突いてこちらを睨んでいた。「何を考えてたのよ、誰のことを考えてたの!？」

「悪かったよ。だから落ち着いてくれ」

ぼうつとしていたのは事実であるから、俺は素直に謝る。とりあえず話をしないことにはどうしようもない。しかし彼女は余計に怒ってしまったようだった。

「いっつもいっつもそうなんだから!ちゃんとあたしを見なさいよ! なんなのよ、あなた! あたしって一体なんなのよ!」

正直に言っただけの意味が分からない。彼女のいわんとすることが、俺にはもはや理解できない。なんだかどうでもよくなってきたしまった。

「おまえ、うるさいよ」

尚も何か言おうとしていた彼女の言葉を遮って言った。

後のことは思い出したくもない。ただただ無性に美しい光の舞う光景を脳裏で追いかけていた。

菅田千尋（カンさん）の場合

Mの場合

11月初めの日はとても気持ちの良い天気で明けた。気分良く職場に着いた私はいつもの様に鍵を取り出そうとして、しかし既にそれが開いていることに気が付いた。

「おはよう。めずらしいね、あんたが先に来てるなんて」

「たまにはね。目が覚めちゃったからさあ。あ、おはよ」

開業前の掃除をしながら振り向いた三山は、実に爽やかな笑顔だった。早朝の切り裂くような空気の冷たさにさらされてこわばっていた私の頬がほっとゆるんだ。

三山と私は大学時代からの友人で、今ではとある会社を共同経営する間柄である。正確に言えば、彼女の事業を私が経理・事務面からサポートしているということになる。もちろんそうは言っても二人しか人手のない会社のこと。私も接客をこなすのだが。

私が荷物を置いている内に三山は事務所内の清掃を終え、外を掃除するために出て行った。私は帳簿類を整理することにしてデスクに向かう。

椅子にかける前に気が付いて、柱に付けたカレンダーを一枚破る。書き込みができるシンプルなカレンダーのまっさらなページには、落ち葉色のインクで11月の文字が示されていた。

『ああ、そうか、11月なんだ』

今更のように私は認識した。

掃除を終えて戻ってきた三山が私の方へ向かってきて、その途中、カレンダーの前で立ち止まる。

しばらくじっとそれを見つめていた三山が、ぽつりと呟くのが聞こえた。

「ああ、もうなんだ」

そつと三山の表情を盗み見て、私は改めて今日のスケジュールを確認した。

三山が逃亡したのはその日の昼過ぎのことだった。

いつも明るくてエネルギッシュな三山が落ち込んでしまう時期がある。それが毎年この辺り。11月だった。

この時期は彼女にとっては大変辛い時期なのだ。家族旅行中に事故に遭い、ただ一人生き残った、それが5年前のこと。

三山斎という人間を劇的に変えたといつて過言のない事件の起きた時期なのである。

そついった事情は承知の上で、再会して3年このかた、毎年この時期になると逃亡を企てる、既にパターン化した彼女の行動になれつこになったとはいえ、やはり仕事をしている身でのこの行動はいただけない。とりあえず三山の携帯電話に連絡を試みる。

長いコールの後、やっと三山の声が返ってくる。それでも回線が通じただけでも私は安堵する。

「何やってんの。今どこにいるの。今日15時から来客でしょう」

「あー…そう、だっけ？」

何を言ってもとばけた返答を返す三山の声は微かで、聴き漏らさまいと私は全神経を聴覚に集中させる。

「ミコにまかせる…お願いねー」

私の言葉に生返事をしていた三山は、そつ言つて唐突に通話を切つてしまう。

「まかせるつてこら…！いつ戻るかくらい……」

怒鳴ろつとしたが、思いとどまって受話器を置く。

毎回のことなのだ。それは分かっている。だからそこまで心配はしない。だから、私がこんなに腹を立てているのは、そついうわけじゃない。

それでもそんな私たちの個人的な事情は社会生活においては何の強制力を持たないのだ。

私は大きく息を吐いて気持ちを入れ替えると、来客を迎える準備をするために席を立った。

『くやしいなあ』

胸の奥で燻っていたらしいぼんやりした想いを日本語に変換するとそういう言葉に成ったらしい。

『何がくやしい？』

仕事の合間、ぼつとできた空白の時間にふと脳味噌の片隅がどうでもいいことに思考を巡らせる。だからこんなことは大変にどうでもよいことで、意味などない。重要性などないこと。だから好き勝手に思考の暴走を許してしまう。

何がくやしいと言って、私が三山の一番になりえないというのが、なりえていないというのが、くやしいと思う。私は彼女のことを親友だと思っていて、彼女も私のことを親友だと言ってくれているから、尚のこと。

私たちは色々なことを話し合う。それこそ公私取り混ぜてたくさん のことを。

それでも私は彼女の最大の傷に触れることができない。それは、私がその彼女の傷である時間を共有できていないからなのだろうと思う。そしてそう思うからこそ、私もこれ以上何もできないでいる。本当はもっと三山の力になりたいと思っているのに。

5年前、三山が事故に遭った頃、私は三山の側にいなかった。大学を卒業してからすぐに私は留学していた。日本で就職していた三山とは時々電話やメールで連絡を取り合っていた。しかし1年

も過ぎる頃にはそれも間遠になっていった。三山のことを忘れたわけでも友情を感じなくなっていたわけでもなく、単に私が無精者であっただけなのだけれども。

三山が事故に遭い家族を亡くしたということは、2年目を目前にした頃に三山から知らされていた。しかし当然のことながらそのために帰国することはできなくて、気にしながらも帰国して三山に再会したときには既に事故から2年が経過していた。

3年ぶりに三山に会って、私はひどく後悔した。側にいてあげたかったと思った。

何が変わっていたと言葉にはできない。ただ確信できたのは、三山に刻まれた傷は容易には消えない、一生背負うものであるということ。2年が過ぎたその時未だ歪に固まりきっていなかったそれは、5年経った今でも一見平らかなようでいて、実は歪みきったまま凝ってしまった。少しでも突付けば血と膿を吐き出してしまふかもしれない、生傷なのである。

側にいてあげたかったと思った。今でも時間を巻き戻せるものならばそうしたいと思っている。結果的には何も変わらないのかもしれないけれど。でももしも私が側にいたら、今尚彼女に残る傷を少しでも浅いものにしてあげられたのかもしれないと、そのくらいは自惚れていたいのだ。

そのくらいには、三山斎に対する私の存在を重いものであると自惚れていたいのだ。

だから、とても腹立たしいのだ。

彼女を、三山斎を癒すことが、もしかしたら救うことすらできるかもしれないくせに、逃げる道しか選ばうとしないあの男のことが。

気に喰わないのだ。

憎らしいのだ。

立花美子（ミコさん）の場合

S の場合

たけなわを過ぎた飲み会の場には何とも言えない気怠さが漂っていた。

月に何度か誰かの部屋におしかけて持ち寄りでやる飲み会がある。本格的な冬の季節の入り端を迎えた今夜も、特に理由もなく僕たちは集まっていた。

いや、理由らしい理由が一つあった。昨年大学を卒業して就職したあの人が、久々に休みが取れたのだった。と言っても日中はやはり仕事が入ってしまったということで、結局途中参加で早々に帰ってしまったのだが。

まあ、休みが取れたから、というのも久し振りに会いたいから、というのも言い訳で、つまりは飲みたい連中が都合をつけて集まったというだけのことなのだが。だって別に彼女は遠い所に住んでいるわけではないのだから。

室内の様子はというと、正に一言で「死屍累々」。

基本的にのみたい奴が飲みたいものを持って集まるのだから、リミットは自分で計らねばならない。しかしそれが旨くいった例はない。まあ、こういうのを「若者の特権」というのだろう。

あれ？「若気の至り」だったわけ？

もちろん例外はある。途中参加のくせに人の2・4倍くらいのペーイスで飲んで周りのつぶれているのを尻目につい十数分程前に帰宅していったあの人など良い例だ。彼女が酔いつぶれたところなど、僕は本当に一回くらいしか見たことがない。

今、この部屋に残っているのは僕を入れて3人。1人は完全につ

ぶれてぐーすか寝こけている。もう1人もついさつきまでにやにや笑いながらその辺にあった雑誌を読んでいたが、今見ると本棚にもたれて動かない。

そして僕はといえば、酔い覚ましに窓辺で風に当たっている。まあ、多分、余人から見れば、他の2人と大差ない状態だろう。

既に肌寒いというレベルを超えて寒い夜気は、僕の火照って朦朧とした脳髓をちょうど良く冷ましてくれる。

かすかに香ばしい香りが部屋の側から漂ってくる。曇ガラスのはめこまれた化粧ドアの向こうのキッチンスペースで灰色の人影が動いているのが見える。今夜のホスト、つまりこの部屋の住人であるカンさんがコーヒーを淹れているようだ。

このホストは非常によく働く。

酒をつくって肴をつくって、皆が酔いつぶれる頃にはお茶がコーヒーが出てくるのだ。もちろん、本人も呑みながらだから、しばしば怪しいシロモノ代物が出てくるのだが、それにしても、良い香りだ。何の豆かとかは分からないけど、匂いだけでもおいしそうだ。ゴボゴボという音も聞こえるから、そろそろできてくるだろうが。

だいぶ意識がクリアになってきた。わずかに尻の位置をずらして半身を起こす。

「~~~~~う~~~~~」

意味不明の呻き声が聞こえて、僕はそちらを向く。先程までまるまって爆睡していた後輩が、芋虫よろしくのそのそと身を起こしているところだった。

「おーーだいじょぶかーー？」

間延びしたような僕の声に気怠そうに頷きながら、彼が大丈夫です、というようなことをもごもご言う。とりあえず気分が悪いとかではなさそうだと思う。まあ、こいつは今夜集まったメンツの中で

一番に脱落していたから、量としてはそんなにいつていないはずだった。むしろペースが上がったサイさんに付き合ったり、酔った頭でオリジナルカクテルを作り出したカンさんの試飲役にならなかった分、悪酔いは心配しなくてよいだろう。

ちなみにテンションが上がってペースを1・2倍程に上げたサイさんと一緒にカンさんのオリジナルカクテルを飲んでた奴は、気が付くとこの部屋にはいなくなっていた。帰ってしまったのか、未だに外で酔いを醒ましているのか、それは確認できていない。

「…あ、れ？ シュウ先輩、あの人は？ あの」

どんよりした表情ながら、とりあえず覚醒したらしい後輩が周囲を見回しながら言う。

「……ああ、サイさん？ もうとつくに帰ったよ。明日も仕事なんだと」

僕の答にきょとんとした表情になる。

「ええ？ 明日って日曜ですよ？」

「…あれ？ そうだよなあ？ でも確かにそう言ってたけど……」

まあ、不規則な仕事だと言っていたから、そういうことなのかもしれない。

「それにしてもすごい人でしたねえ」

かなり意識もはつきりしてきたらしい後輩がしみじみとした口調になる。誰のことを言っているのかは名前を出されなくてもわかるので、僕は頷いた。

「あの人、結局おれらより呑んでたでしょう？」

「しかもカンさんのあのカクテルを」

「おれ、ちよつと飲んでみたけど、やばかったっすよ、あれ」

「そーとー濃くて甘かったよな」

その時のことを思い出したのか後輩が顔をしかめながら言い、僕も同じような表情で深々頷いた。

件のカクテルとは今夜カンさんがつくった中でも最悪の出来のカクテルで、ミルク分と糖分の飽和状態の液体にアルコール分が加味されていると思えばいい。麦茶グラスに入った褐色に濁ったカクテル。甘さだけでも喉を焼いて、飲み込むと胸の中央辺りでかあつと熱が生まれた。その感覚を思い出すと、今更のように酔いが回ってくる。さすがのカンさんも失敗作だと認めて回収しようとしたそれを、サイさんは一度口をつけたんだから、と飲み干してしまったのだった。

「さすがにカンさん呆れてましたね」

そのとんでもないシロモノを喉を反らせながら飲み干したサイさんの姿が思い出される。そういえばあの後、いつものようにサイさんの笑い上戸のスイッチが入っていたんだっけ。

「キャハハハハ……」

としか表現しようのないあの陽気さにも慣れたはずだが、やはりうるさかった。頭に響くその声は確かにとてもきれいなのだが。

ザルとかウワバミとかいう言葉は彼女のためにあるに違いないと僕は思う。

「でも、なんてのかなあ」

ふと後輩の声のトーンが変わる。

「なんつーか、うん、なんつーか、すごくいい女って感じがした」

「はあ!？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまい、慌てて自分の口を押さえた。頭がずきずきするのは酒のせいだろうか。

「いや、おれも何て言っていていいかわかんないんですけど」

後輩は特に気にした様子もなく続ける。

「あの酒ののみっぷりもちよっと……なんですけど。でもなんてのか、何て言うか、すごく色っぽいってゆーのか……」

「そりゃサイさんは美人だけど」

「そういうんじゃないですよ。確にかわいい人でしたけど。何つののか…なんだろう？安心できないような。無防備つてのか？とにかく目が離せないような、そのくせ側にいて話するとすげー安心できるつてのか。あー、あの胸と目は反則だよなあ」

こいつ酔ってるな、と僕は改めて判断を下す。

つくづく、この場にサイさんがいなくて良かった。それにカンさんも　　とつい思って、目を上げる。やはり曇ガラスの向こうで人影が見える。

「でもあれで今あのヒト、フリーなんでしょ？おかしいよなあ…ねえ？ほんとに何も無いんすか？あの人たち」

こいつは酔うと饒舌になるらしい。

「だっていい雰囲気だったじゃないですか？間に割り込めないくらい。あんなひつついてんの見てたら、なんかこっちまで恥ずかしかったすよ」

「あー…ああ。何もないらしいよ、あのヒトたちは。あれで」

「……わっかんねー……男だったら普通はさあ……」

そう、あのヒトたちは何もない。少なくとも今は、とっておくべきか。僕も詳しいことを知っているわけではないが。確かに以前は「何か」あったらしい。だが今では「付き合い」という関係ではない。はずだ。一応、サイさんはそう言っている。

「まったく、あんないい女、側にいて、何もしないっつーのがもったいないよなあ」

僕の手が無意識に奴の頭をはたく。いてえ、と悲鳴が上がったが大したことはないだろう。全然力など入っていない。

まったく、少しは考えろ。当事者の一方はドア一枚向こうにいますぞ。そう思って、慌てて顔を上げた。閉じたドアの向こうからカチャカチャと食器の触れ合う音がする。良かった、聞こえてはいないようだとはっとする。

「じゃあ、シユウさんは何も思わないんすか？」

はたかれた理由は分かったのか、声を潜めながらも睨んでくる。

「僕はないな。だいたい、僕はみづきさん一人で手一杯だよ」

「……うそくせー」

聞こえないくらいの呟きは、しかし口の動きで何を言いたいかは分かった。しかしあえて無視する。

確かにサイさんは美人だし僕とて彼女に女性としての魅力を感じないわけではない。

でも、駄目なのだ。何というか、あの人と一緒にいると確かに楽しいけれども同時にひどく恐ろしくなるときがあるのだ。引き込まれるという感じか？ いやむしろ吞まれるというべきか。

「はまるなよ」

つい口にしてしまってから、改めて言い直す。

「あの人にはまると抜け出せなくなるぜ」

ぶはっの後輩が噴出す。

「何すかそれ。先輩の言ってることの方がよっぽど生々しいつすよ」
何とでも言えばいいし笑えがいい。どうせこれが僕の正直な感想なのだから。

ガチリとドアが開いた。あたたく香ばしい匂いがふわりと漂う。
「何笑ってんだよ」

今夜のホストのカンさんがコーヒーを持って来る。この人は何でも凝り性で、これも自分でお気に入りをブレンドしたコーヒーなのだ。コーヒーなんてインスタントでも缶でも違いなんて分からない僕には、その辺りのこだわりはよく分からない。でも酔い覚ましとしてはカンさんのコーヒーは絶品なのは確かで、僕は大好きだ。

「いやあ、噂通りのすごい人だったなーって」

適度にぼやかしながらへらへら笑ってみせると、カンさんもくくっと笑った。

その後しばらくは再びこの場にはいない人の話題を中心にくつつやべっていた。マグカップのコーヒーがなくなる頃、ふと話題が途切れる。一瞬の静寂が部屋の温度を一気に下げたような気がする。そんなタイミングでふと後輩が言う。

「でも、何かあの人、今日は疲れてたんすかね」
「え？」

「だって、なんてのか、確かにすげーうるさくて酒入ると最凶つての分かった気がするけど、でも何かそれ以外のときはすごい寂しそうで いや、悲しいつてのか、とにかく何とも言えない泣きそう な力オしてたんですよー。それともあれが普通なのかな…」

気付かなかった。そうだった？というのが素直な感想だった。まあ、仕事で疲れていたのかもしれない。そんな日だってあるだろう、あの人だって。

物音に気が付いて振り向くと、カンさんが部屋を出て行こうとしていた。

「悪い、出てくる」

「へ？どこへ？」

「ちよつと」

なんだかこちらが要領を得ないまま、カンさんは出て行ってしまった。何だかわけが分からないが、すごく真剣な表情だったのが印象に残っている。

結局、その夜カンさんは帰って来なかった。

その日の少し前にサイさんが事故で家族を亡くしていたことを知ったのは、それから少し後のことだった。

「そつか。もう今年もそんな時季か」

僕がサイさんの職場逃亡を知ったのはその日の昼であつた。本当に偶然たまたま昼食のために『Mooner's Bar』に入つたため、ミコさんからマスターへの電話を聞くことができたのだ。あの時から五年経つ。サイさんは毎年この月、11月になるとナーバスになる。つまり家族の命日が近くなるといたたまれない気持ちになるらしい。サイさんにとって家族を亡くしたことはそれほど辛い出来事なのだ。

ミコさんはこれはサイさんの甘えなのだと言う。ただし、許容すべき甘えであると。

カンさんは、普段張り詰めているサイさんが、まるっきり脱力してしまっている状態なのだと言う。月夜のサイさんがゆるんではかなくなってしまう、その延長上なのだと。

二人とも似たようなことを言い、多分同じくらい心配している。どちらも傍目には分かり辛い人だけど、僕には分かる。少し違うのは、ミコさんは怒っていて、カンさんは思い詰めるように悲しそうなことだ。そしてミコさんはそんなカンさんにも怒っているようだ。

「とりあえず、サイさんを見かけたら連絡しますよ。行きそうな所にも気を付けておきます…ええ、ここにシュウさんもいますので、

伝えておきますよ… ええ、はい」

マスターが僕に視線を向けて、小さく口を歪めて笑ってみせる。僕も軽く頷きを返す。

とりあえず、カンさんにも連絡を入れておこう、と僕は思った。

空木秋晴（シュウさん）の場合

Kの場合

彼女のことをひとことで表現するならば、ちょうちようだと思う。ただし、昼の陽の中ではなく月影でこそきらきらと羽根を輝かす迷い蝶。

離れていれば鑑賞に値する美しさのくせに、近目ではグロテスクですらあるところまでそっくりだ。

捕まえたい。閉じ込めておきたい。そんな願望を捨て切れず、さりとて俺にその力はないことも重々承知していて。

俺はただ、目の前をひらひらと飛び回るたった一人のちょうちように翻弄され続けている。

彼女が行方をくらませたとの連絡が入ったのは11月に入ったばかりの昼過ぎ。大学時代の後輩から携帯にメールが届いていた。曰く、

『サイさんが職場逃亡したそうです。』

見かけたらミコさんに連絡お願いします。

僕やマスターにもできれば』

気分が悪い。毎年のことだが。毎年同じように同じ騒ぎを起こすのはやめてくれ。頼むから。そう、怒鳴りつけられたらどんなにいいか。その場面を想像して俺は深々と溜息を吐いた。

ちようちようは気まぐれだ。花から花へ、触れたり遊んだり止まったり。

花の都合に構わず、自分の好むところへ、気が向くままに、ふらふらと舞い飛び回る。

それがどうということではない。それがちようちようというもので、それを知った上で花たちは彼女を愛し、欲するのだから。

ただそれに不満を持つなどと言える権利は、例え当のちようちようにだってない。そう俺は思う。

俺は平穩に暮らしたい。

たった一人のちようちように惑わされるなんて、冗談ではないのだ。

5年前、彼女は事故で家族を亡くした。

家族で初めて行った海外旅行中の出来事であつたらしい。彼女一人が助かったのは、たまたま別行動をしていたからなのだとか。

彼女はごく普通の家庭で、ごく普通に愛されて、育った。それが非日常の事故で突然、永遠に失われた。ひどい衝撃だったろう。苦しんで当然だろう。

だが彼女が本当に心を碎かれてしまったのは、そんなことだけではないことは、皆は知らないことなのだ。

その夜出会ったのは本当に偶然だった。

たまたま大学のサークル棟で寝こけてた俺が目を覚めたのが既に日付も変わろうかという頃。さすがに室内どこるか棟全体に人気

がなかった。帰るか、と思った時、来たのが彼女だった。

こんな、既に「夜」ですらない時間に人が来ることも、ましてやそれが女一人であることも異常だったが、何より背負った雰囲気がいまいち異様だった。

入口で俺の姿を見留め、一瞬驚いた顔をしたものの、何も言わずに近付いてきた彼女は、視線も足取りもどこかふらふらしていた。机を挟んで向かいのパイプ椅子に座る。その時、ふわりとアルコール臭がした。

「酔ってんのか？」

「酔ってませんよー…ただワイン一瓶空けただけー」

…絶対に酔ってるだろう、それは！

と思ったが、何も言わなかった。それ以上に言うべきことがあると思った。

「… 帰るんですか？」

「あー…まあ、そろそろ……」

語尾は誤魔化すように消した。それよりも、と声に力を込める。

「どうかしたか？」

どうかしてないわけがない。彼女の家族が旅行中に事故に遭ったことは既に聞いていた。直後にこいつから電話があつたのだ。そしてしばらくは学校に行けないと思う、という連絡。やはり真夜中にかかってきたごく短い電話は、いつもの彼女の声とは思えない程、別人の声だった。心配、はしていたのだ。例えば普段はどんなに複雑に思っただけでもない。

彼女はじつと俯いていた。机の表に何か書いてあるのかという程、じつと動かなかった。泣いているのか、それとも眠っているのか、と俺が思い始めたころ、ようやくその肩が動いた。

「本当に、ひとりぼっちなんだなあって、思っただけ」

「…え？」

ぼそりとつぶやかれた言葉は、こんなに静かな場所さえ、聞き逃しそうなほど、微かなものだった。思わず身を乗り出した俺の目

の前で、ようやく彼女が顔を上げた。色素の薄い、ブラウンの瞳が真正面にある。しかしそれは驚くほどに空虚で力無く、俺の背筋に寒気が走る。

「ねえ、千尋さん」

彼女の形のいい唇が動くのが見える。口唇もその口調も、乾き切っているように思えたのは気のせいかな。

「私って一体何者なんでしょうね」

普段なら何言ってたんだ、と馬鹿にしたくなるようなセリフが、何故か何も言えないと思う程に俺の全身の自由を奪い取った。

「
」
蠢惑の口唇が言葉を紡ぐ。

凍り付いたように硬直している俺の視線とかがつきり絡み合う彼女の瞳。

どこか浮世離れた色彩の淡いその色。

形良く整ったかつきりした眉。

ずっと伸びた鼻梁。

青い血の色を透かしたこめかみ。

程よくなだらかな頬の線のもり上がり。

淡く紅色を透かした形の良い口唇。

抗えない俺は、ぎこちなく距離を詰めていた。

明け方の光を浴びる彼女の背は鮮やかな輝きに満ちていた。その眩さに思わず俺は目を細めた。細く輝く視界の中で、ゆっくり彼女が振り返る。

「おはよう」

にこりと微笑む彼女は、昨夜とはまるで別人であるように俺には思えた。何かを脱ぎ捨てたように、美しく見えた。

＊＊

『でもなんか、あの人今夜は疲れてたんですね』
『なんてのか、すげー悲しそうに見えた。うまく言えないけど。さ
みしいってのか』とにかく、何とも言えない感じがしたんすけど』

後輩の言葉が俺の背筋に寒気を走らせた。覚えのある寒気だった。
それがどういうことか、理解する前に俺は立ち上がっていた。部屋
を出る俺を後輩たちが呼び止めたが、なんと答えたかも覚えていな
い。

間違えたか？

見誤っていたか？

判断を誤っていたか？

それ以前に

何故気付くべきことに気付かなかった？

何故、今日初めてあいつに会った奴に見えたものが、自分には見
えていなかった？

この腕は彼女を抱いていたのに。

息のかかる程すぐ側で言葉を交わしていたのに。

まだ、俺は、間に合うのか？

街灯の少ない夜道の先で、見覚えのある背中を見つけた。

あの朝の背中に似て、さにあらず。

それはあの夜、月の明かりの下で見た彼女の姿だった。

一体この時間まで何をしていたのか。俺の家から彼女の家までは20分もかからない。しかしどう見積もっても彼女が俺の家を出てから30分以上は過ぎている。

車も通らない、人も通らない。ちかちかまたたく街路灯がまばらに並ぶ、静まりかえったオフィスビルの狭間。

大きく振り回すように歩を進める彼女の靴がアスファルトに積もった落ち葉を踏む音だけが風の中に聞こえていた。

しばらくその姿を眺めて逡巡してから、俺は二、三步後ろまで近付いた。そこで息を整え、おもむろに口を開く。

「齋」

がさり、と枯れた葉の碎ける音がした。明滅する街路灯に照らされたコートの中が、ゆっくりと振り返る。

星のように白い頬。夜の闇に紛れるしっとりした黒い髪。薄墨色におちる影の奥で、鈍く光る両の瞳。首に巻かれた鮮やかなブルーのマフラーが風に煽られ、ばたばたと音を立てる。その頬に光る、幾筋もの透明の雫が、まるで別世界のもののように見えた。

何故今の今になってようやくこれが俺に見えるようになったのだろっ。

見るための材料は揃っていたはずなのに。

けんかしたんだ。

意地張って。

だからあの日別行動したんだ。

そしたらみんな事故しちゃって。

あたしだけ助かって。

何で一緒にいなかったんだろ。

そしたらあたし今こんなところで一人ぼっちじゃないのに。

もしあたしがあの時死ぬ運命じゃないのだとしたら、

もしあの時あたしがあそこにいたらみんなも死ななかったかもしれないのに。

病院に着いたのだったもつと早くに行けなかったのかな。

助けてっようお願いすることもできなかった。

血を使っつて言ったらだめだった。

あたしの血、みんなに合わなかったって。

あたしの血、みんなを助けることすらできなかったの。

こんなに有り余ってるのに。

あたしの血はみんなと同じじゃなかったんだって。

血が同じじゃなかったってあたしがみんなを愛してたことは嘘じゃなくて。

みんながあたしを愛してくれていたことは一つも嘘じゃないけど。

でもあたしが築いてきたあたしの記憶は、

あたしが今のあたしであるための足場が、

あたしがみんなと同じところで生きてきたって証が、

あたしがみんなと家族だったって証拠が。

全部嘘だったんだって。

全部、根底が違ったんだって。

あたしは本当は一人ぼっちで。

そして本当に独りぼっちになっちゃって。

あたしはあたしが誰なのかも分からなくなっちゃって。

抱き締めていた腕の中で、確かに切れ切れに、俺は斎の言葉を聴いていたのに。

今目の前で月光に照らされ輝く幾筋もの雫が、一つ一つのセリフを俺に思い出させる。

見えていたはずなのに、見ていなかったもの。
目の前のこの女が、自尊心の強い、強い女が、何かを脱ぎ捨てる

ことができるときなど、夜の闇を除いて他にないことなど分かり切っていたのに。

朝の彼女が何かを脱ぎ捨てていたのではなかった。

夜闇で虚ろに笑ったその姿こそが、真の三山斎の姿だったのだ。

「待ってたの」

夜の風に乗って、微かな声が俺の耳に届いた。

「探しに来てくれるの、待ってたの」

細かく明滅する街灯の下で、ゆっくりと斎の頬が笑みの形に歪んでいくのが見える。

「見つけてくれるの、待ってたの」

口元の筋肉が引きつるように痙攣し、そのたびにぱた、ぱた、と雫が撥ねる。

嗚咽もなく、ただ静かに涙を流す三山斎の姿はひどく醜くて、ひどく清らかに見えて、例えようもないほど慕わしかった。

三山斎という女のことを表現しようとする、きっと誰もが困ると思う。

ある者はばりばりのキャリアウーマンだと言うだろうし、ある者は酒を飲んで夢のような言葉を吐き続けるだけと言うだろう。

そのどちらも正しいと知っている俺は、というと、それはもう、本当に困ってしまうのだ。

頭をひねっている俺の目の前を、ひらりとよぎる羽根。

「ああ、そうだ」

三山斎はちようちようのような女だと思う。

ひらひら目の前を飛び回り、捕まえようとすればいつも空を掴ま
せられる。

捕まえられないのに、目の前でひらひらあでやかに舞う、うるさ
いちようちよう。

古の人がむき出しの魂の姿と信じ、彼岸と比岸を往来できるもの
と信じた美しい羽根虫。

メールを読みつつ深々と溜息を吐く。しかし脳裏には高速処理で
斎の行きそうな場所がリストアップされている。そんな自分自身に
更に溜息を一つ。

結局俺は、この蠱惑に捕らわれ続けているのだろう。

菅田千尋（カンさん）の場合

Sの場合

私は夢の中、「私の部屋」で立っていた。

明らかに「現実の私の部屋」とは違う場所なのだが、夢の中の私はそこを紛れもなく「私の部屋」と認識しているのだ。

特にこれといった特徴のないマンションの一室。妙に無機質に見える部屋。視線を床に下ろすと、「お母さん」が座っていた。

少し小太りの体で背を丸めるようにして正座しているので、何だかちまつとして見える。グレーに見える髪の毛を後ろでひつつめている。そんな姿のおばあさんだった。

（あれ？私のお母さんって…？）

違和感を覚えるが、それ以上に夢の中の私は彼女を「お母さん」と認識していた。だから疑問もすぐ消えた。

突然、侵入者が現れた。玄関への角からぬつと現れた男。奇妙に静かで暗かった。

（襲われる！）

とっさに思った。恐怖感と怒りが同時にはじける。

（「お母さん」を守らなきゃ！）

私は慌てて「お母さん」を庇うように男に向かった。

（近付けさせない！）

私が侵入者に敵意を向けるのに呼応したように男が凶暴性を向けてくる。殴りかかろうとする腕をおさえ、もみ合うように押し合う。恐怖よりも頭に血が上ったような興奮。無我夢中で争っていた。

「やめなさい」

突然声がした。断固とした、強い声。驚いてそちらを見ると、それは「お母さん」だった。

「やめなさい　なのだから」

どきりとした。思わず腕の力を抜いて、そして私は自分が争っている最中だったことを思い出す。

（危ない！「お母さん」が！）

慌てて向き直る。でももうそこに脅威はなかった。

私はこわくて、悲しくて、とてもとても、かなしかった。

墓参りをするのは年に数度。故郷に墓を作ってしまったため、毎日行くなんてことはできないのだ。それでもあたしはそうしてあげたかった。血とか地とか、縁のあるところで眠らせてあげたかった。今年も気付いたら、あたしは故郷の地を踏んでいた。いつ、どうやって新幹線に乗ったのかも覚えていなくて、懐かしい光景の中に自分が立っていることに気付いたときは、むしろあたし自身が呆然としていた。

既に体が覚えている道を歩き、いつもの花屋で少しの赤い花と長持ちする緑の枝と線香を買い、見上げるような長い石段を息を切らせて登る。

既に冬の手前の季節であるにも関わらず、登り切ったときには肌はじんわり汗ばんでいる。軽く額を押さえながら見下ろす眼下に遠く青く円い広がり。薄く灰にけぶるようなその色が、あたしの心を何となく落ち着かせる。胸いっぱい息を吸い込んだ。何となくまぶたの裏側がじんわり熱くなった。

まだ真新しいといってよい墓は、それでもそれなりに汚れていた。それでもきつと、父さんや母さんの縁に繋がる誰かや兄さんの知人は来てくれているのだろう。見覚えのない花や線香の残骸があった。それらをきれいに片付けて、新たに水と花と火をあげる。

あたしはこの中に入ることはないだろうな。手を動かしながらあたしは思う。三人だけのためのこの墓は居心地いい？と心の中で語

りかける。

一般的な常識で言うなら、将来誰かがあたしを嫁にもらってくれば、あたしは嫁ぎ先の墓に入ることになるのだろう。でもどちらかと言えば、あたしは一生どこにも属さず最期はどこかの海に葬りたい。そんな風に考えてしまう。

生命を連鎖させ、種を存続させることが生物の生命の大前提であるとするなら、あたしはそれに従う気のない異端児なのだと思う。自分の遺伝子など後世に残らなくて構わない。そう本気で思っているのだから。

「別にね、あたしの出生がどうこういうことじゃないんだよ」

墓前にしゃがみこんだまま、呟く。見違えるようにぴかぴかになった磨かれた石の表面に、あたしの顔がぼんやり映っている。

「どうにもね、あたしはそういう気がないんだってこと。多分、知る前からそうは思ってたの。でもはつきり口に出して言えるようになったのは…この数年だけだね」

自分の遺伝子を持った人間が何十、何百、何千年後にいる、そのことに価値を見出せない。

繋いであげたい遺伝子にも巡り会えない。

かと言って、人間の存在を価値がないとか思ってるわけじゃない。ただ「私」に関して考えるなら、人間が後世に繋げるものって、そんなものだけじゃないんじゃないかと思うのだ。

「言い訳：でしかない？それともやっぱ詭弁かな？」

自嘲げに笑うと、あたしは立ち上がった。

また来るね。そう呟いて踵を返す。燃え尽きた線香の焦げ臭い匂いがした。

ただ愛しい人が、存在が欲しいというだけなら、あたしは身をもって知っていることがある。血が繋がってさえいれば無条件に愛せるというわけではないということだ。

家族を亡くして初めて、あたしはあたしにたくさんの「血縁者」が存在するということを知った。それは誰かが死なない限り、知り合うこともなかった「親戚」なのだ。そして彼らの存在があたしを救うということはなかった。彼らはあくまで「他人」だった。たとえばあたしが本当に父母と血が繋がっていたとしても彼らは変わらなかったらう。

「血縁」とは単なる生物学的な繋がりであり、そこに交友が成立するかどうかはあくまで人間同士の努力によるものなのだ。彼らはそれをあたしに学ばせてくれた存在であつた。

ならば一体、自己の血を後世に残すことに、何の意味があるだらう？

三山斎（サイさん）の場合

Mの場合

15時過ぎの客との打ち合わせは滞りなく終わった。

といつても、今日の主な打ち合わせ内容が予算の詰めと書類の確認という、事務レベルのものであったからこそだ。これがプランの打ち合わせであつたなら、私にはお手上げなのだ。

そう考えると、三山に怒ってもよいのではないかと他人からは思われそうだが、私にはそれはない。むしろ都合よくこの日を選んだ三山に感謝をする。

そしてこんな私のことを、親しい友人どもはこぞつて「甘やかしすぎ」だと言う。

私自身は三山に甘くしているつもりはない。でも彼女のことが私の中で一番であることは否定しない。

私が三山と出会つたのは大学生のとき。同じ学部と同じ学科だった。女子の多い学部だった。

当時から私の性格は変わらない。…少しは協調性というものはできたとは思っているが。親しく話す友人はいるが、特にそれ以上懇意になろうという努力には乏しかった。だからといって別に不便を感じたこともなかった。それで全く構わないと思つていたので。

あの時まで。

私が大学に入学して数カ月後、私の親がとある脱税事件に関わり、逮捕された。幸いというか何というか、罪状は軽く、今現在は日常生活に戻ってきている。

だが、それでも当時は、新聞にも取り上げられるほどの事件の関係者であつた。実家を出て一人暮らしをしていた私のところまで来た記者もわずかではあるが、いた。

そしてそんな状況は、私を周囲から孤立させた。
数少ないながらもいた親しく話をする友人は私から距離をとり、
聞こえるか聞こえないかの陰口は、私にも届いた。

気にしているつもりはなかった。

小学生の子供くらいならともかく、いい加減いい年をした大学生
のこと。あからさまないじめや嫌がらせなどはなかった。

それでも気が付いた時には私が友人と違っていた人は私を避け、
法学を志していた私を責めるような声も聞こえてきた。

気が付かないつもりでいた。

でも気が付いたら、私はひどく孤独で、傷付いていた。

そんな時、ただ一人私を避けなかったのが、三山斎だった。

別に彼女が何かしたわけでも、何か言ったわけでもない。

何もしなかった。何も態度を変えなかった。でもそれこそが、私
を本当の孤独に陥れることを避けた。

私はいつまでも、彼女の言葉を忘れない。

「ミコが何か悪いことをしたの？何もしてないでしょう？」

何かの会話のはずみのそんな短い一言。

何でもない、そんな普通の一言が、今なお私の中から消えない。

幸い、事件はそんなに長い間世間を騒がせることもなく、私は無
事に二年次から法学の専門コースに進んだ。

世間も、そんな事件のことはすぐに忘れ、話をする友人も、また
戻ってきた。

三山は、終始一貫変わらなかった。事件の前も、最中も、後も。

コースが違ったことで授業もあまり重ならなくなった。

でも、会えば会話は弾むし、どこかへ遊びに行ったり、買い物
したり、飲みに行ったり。そんな付き合いは、彼女と一緒にのときが
一番楽しかった。

私は、彼女と一緒にいるときに、誰といるよりもいつも気楽で、誰といるより楽しかった。

そしてそれは、今でも変わらない。

他人がどう思おうと、構わない。

私には、三山が大切だ。

私を救ってくれた、三山が幸せであってほしいと願う。

三山自身がどう思っているように、私には三山が大切なのだ。

三山には幸福であってほしい。

だから、あの男は気に入らない。

誰よりも気に入らない。

でも、三山はあの男をおもっている。

だから、私にはそれ以上何も言えない。

三山の幸福は、三山が選ぶもので、私が選ぶものではない。

だから、気に入らない。

あの男は、気に入らない。

立花美子（ミコさん）の場合

Sの場合

墓地を出ると目の前に小さな教会があつて、その裏からたくさんの子供たちの声が聞こえていた。あたしは少しだけためらうと、ゆっくり中へ入つて行つた。

開けっ放しの鉄柵の扉を抜けて木立の下、砂利道を歩く。角を曲がるとあたしに気付いた初老の女性がにっこり笑つた。

「ああ、いらっしやい、三山さん」

闊達なその声が懐かしくて、あたしは自然と口許が弛むのをおぼえた。

ここは教会に設けられた孤児院。そしてあたしを迎えてくれたのは恵子さん。この小さな孤児院の院長さんでもある。

彼女と知り合つたのはここにお墓を作つたとき。

一人で何もかもやらねばならなかつたあたしは、恐らく過労とストレスで、気分を悪くしていた。木陰のベンチでへたり込んでいたあたしを裏に連れて行つて休ませてくれたのが恵子さんだった。それ以来、何となく墓参りの度にあたしは彼女を訪ねている。年齢はかなり離れているが、彼女との話は、とても楽しい。

「久し振りね。元気そうで良かったわ」

事務所でお茶を出してくれながら、彼女が笑つた。

恵子さんはとても若い。実年齢はもちろん知っているけれど、むしろそちらの方が間違っているのではないかとさえ思うことがある。それが彼女が幼い子供たちと毎日接しているからなのかどうかは分からない。だけど彼女がこれまで色んなことを経験してきていることは確かで、こういうのが人生乗り越えてきた人の大きななのだろうかと思う。しかしそれでいてまったく押し付けがましくないその人への接し方は、間違いなく彼女自身的美徳だと思う。

最近のこと、仕事のこと、旅行の話。

とりとめもなく話し、聞く。最終的にはあたしは彼女の話の聞く専門に回ってしまうが、それが楽しい。

あたしたちがそうして話している間も、事務所内を子供たちが出たり入ったりして駆け回っている。一応は事務所には子供たちは立ち入り禁止になっているので恵子さんも注意はするのだが、子供たちは一向にやめる気配がない。入れ替わり立ち替わりいがぐり頭やおさげ髪の新顔がやって来る。もしかしたらちよつとした肝試しになっているのかもしれない。

「そう言えば、夏っちゃん、元気ですか？どうしてます？」

夏っちゃんとは夏子ちゃんという女の子で、この施設の子である。出会ったときはまだ赤ちゃんだった。今はもう6歳になるだろうか？あたしはここに来るたび、彼女と遊んでいるのだ。しかし確か、彼女には養子縁組の話がきていたはずだった。その後どうなったかとかは聞いていなかったたので、気になっていたのだ。

すると恵子さんは悲しそうな表情になった。

「それがね…あの子、ここに戻っているのよ。話、解消しちゃってね」

驚くあたしに恵子さんは説明してくれた。

話は結構最終的なところまで進んでいたらしい。夏っちゃんも特に拒否反応は示していなかった。そのように見えた。しかし何度目かにその家族と会っていたとき、夏っちゃんは『発作』を起こしてしまった。結局はそれが原因で話は解消してしまったらしい。

夏っちゃんにそんな病気があったことを知らなかったあたしは本当に驚いた。少なくともあたしはその場面に立ち会ったことがなかったのだから。

「施設では起こらないの。原因も分からないし。でも一旦暴れ始めると、誰にも止められなくなっちゃうの。意識を失うまではね。今

回みたいな話が進んで、その家族と接し始めると起こり始めるようなの……」

「ということは、今までにも何度かそういうことがあったということなのか。あたしにはとても信じられなかった。少なくともあたしの知る夏子ちゃんはそのような事情を抱えているような子供にはとても見えないのだから。」

「でも私はあの子にはきちんとお父さんとお母さんを迎えてあげたい。その中で幸福を見つけてほしい。本当は夏っちゃんもそれを望んでいるはずなの」

恵子さんの言葉に、あたしも深く頷く。夏っちゃんは事情があつて本当の両親の許から離されているという。

夏っちゃんの精神が自立して、実親の許で暮らしたいと望むのならそれでもいい。でもそれまで、そこまで成長するためにも、たくさんの愛情を受けてほしい。たくさんの心と人と選択肢があることを知ってほしい。そんなものを与えられる父母という存在が、彼女には必要なのだと思う。

夏っちゃんはとてもはにかみ屋でインドアな性格の子供だ。屋外で走り回って遊ぶよりも室内で本を読んだりお人形で遊んだりする方が好きな子供だ。だからこそ、あたしなんかに懐いてくれるのだろう。でもとても優しい、いい子だ。どうしてこんな女の子がうまく生きていけないのだろう。不公平だと思う。

「遊んでいってあげてくれる？」

「もちろん。あの子に会うためにここに来てるようなものですから」その言葉を期に事務所を出て子供たちの部屋へ向かう。夏っちゃんはやはりそこにいた。部屋の入口で夏っちゃんの名を呼ぶと、窓の側の明るいところでこちらに背を向けていた彼女が振り返って嬉しそうに笑った。

今日の夏っちゃんはお絵描きをしていた。他にも2、3人の子供たちがいたが、みんなそれぞれ絵具でどろどろになっていた。キャンパスは四つ切りの画用紙なんかじゃ足りなかったようである。

夏っちゃんと一緒に子供たちの相手をしつつ側で見守っているあたしに、夏っちゃんが近付いてきた。そして両手で持っていた画用紙をあたしに差し出した。礼を言っ受けて取って見ると、そこには女の子の絵が描かれていた。

「おお、上手。これは誰？」

あたしが尋ねると夏っちゃんのはにかんだようにもじもじ笑いながら、あたしを指差す。

「え、あたし……？わあ、ありがとう、嬉しいわあ」

あたしは知らず満面の笑顔になっていたようだ。片手で夏っちゃんをぎゅっと抱きしめてあげる。夏っちゃんがくしゃくしゃに表情を歪めながら笑い声を上げる。

昔読んだ絵本に載っていたお姫様のような女の子。あたしとの共通点といえば、髪長さや性別くらいだが、それをあたしと言ってくれることが、うれしかった。

「あ、恵子さん見てください。夏っちゃんがあたしを描いてくれたんです」

ちょうど部屋に入ってきた恵子さんに絵を見せながら言うと、彼女はひどく驚いた表情をした。しかしすぐににっこり笑うと、夏っちゃんと絵をあたしを交互に見ながら夏っちゃんの頭を優しく撫でた。

「良かったね、夏っちゃん。三山のお姉ちゃん喜んでくれて」

恵子さんの言葉に、夏っちゃんが大きく頷いてあたしを見た。声を上げて笑っている夏っちゃんはとても珍しくて、あたしはいつもよりも夏っちゃんがとてもかわいいと思った。

「ねえ、三山さん、夏子ちゃんのお母さんになる気はない？」

日の暮れる頃、院を辞去して駅へと向かうあたしを門まで見送りに出てくれた恵子さんが言う。その唐突さに冗談かと思って振り返

るが、彼女はひどく真剣な表情をしていた。そのことに戸惑いつつ、あたしは首を振る。

「あたしには無理ですよ。だいたい、養子をとるには結婚してなきゃ駄目なんでしょう？」

「結婚する予定はないの？」

「あいにくと」

おどけたような仕草で肩を竦めてみせるが、恵子さんはやはり真剣そのものだった。けどやっぱりあたしには無理だと思う。だから重ねて真剣に断りの言葉を告げる。こんなこと、軽々しく同意なんてできるわけがない。夏っちゃんを好きだと思っ感情と彼女のお母さんになるということは同次元で考えてよいものではないはずだ。「そう、残念だね。でもしつこいと思うかもしれないけど、本当に少しでも心の隅に置いておいてくれると嬉しいわ。夏子ちゃんは大当にあなたのことが大好きなのよ」

あたしが断ることはそれほど意外なことではなかったのだろう、すぐに恵子さんはそう言うてくれた。それほどがっかりもしてはいないようだった。でも声と表情は真剣だった。だからあたしもそのままではいけないような気持ちになる。

「ありがとうございます。そう言うていただけるのは、本当にありがたいことなのだと思います。あたしも夏っちゃんのこと大好きですよ。だからあの子には本当に幸せになってほしい。そのための最善の方法は、あたしにも考えさせてください。そのためなら助力は惜しみません。それにお母さんにはなれなくても、あたしはずっと夏っちゃんのお姉さんではありたいと思っています」

考えながら、言葉を選びながらそう告げたあたしに、恵子さんはやはりにっこり笑って頷いてくれた。

Kの場合

『三山斎が行方不明になった』

そんな知らせが俺のところまで届いたのはその日の昼過ぎ。

確かに驚きはした。しかし同時に「ああ、もうそんな時期だったか」と思う。

それほどに彼女　　斎が11月になると行方をくまますのは年中行事になっていた。

彼女はいつも誰にも何も言わずに姿を消す。そしてその日のうちか数日後にはふらりと戻ってくる。

戻ってきた時にはすっかり普段の様子に戻っている。しかしその間どこへ行っていたのか、それははつきり語ろうとはしない。

斎のこんな奇行は4年ほど前から始まっている。

だから、実は、彼女の行動の理由は、分かっている。

5年前、三山斎は家族を亡くした。それが、11月。

以来、11月が近付くと彼女は精神的に不安定になる。

そうして、ふらりと姿を消す。

なぜ、どこへ行っているのか？

少なくとも　　死のうとしているのではないことは確かなことだ。

その日は早退することにした。幸い、仕事も込んでいなかった。少なくとも昼までは。

昼過ぎにそっと仕事場を出た俺は、頭の中でいくつかの場所をリストアップしながら、電車を乗り継いで実家に戻り、車を借り出した。

実家の母は何か言っていたが、ろくに聞かなかった。

そんな自分に、少し経ってから驚きの感情が広がってきた。

実家は今の住まいの隣の市にある。

そこから車を走らせながら頭の中で再びリストをさらう。

といつても、思いつく先はそんなにたくさんない。

卒業した学校、前の勤め先。今現在の生活環境を除けば、驚くほどに彼女のことを知らない自分に気付く。

といつてもそれが当然なのだ。

斎との付き合いで、一番距離が近かったのは恐らく学生時代だが、それとてそんなに長いものではない。

何より、『現在』が大切だった。それだけでよかった。

本当にそれだけでよかったのかは、誰にだって分かるわけもないと思う。

学校そばのコンビニに車を止めて構内に入る。

授業中なのか、人気は少ないが、雑然とした雰囲気は今もあの頃と変わらない。

初めて会ったのは、彼女が入学したときだった。

髪が長かった。真新しいスーツに、踵の高い靴音。メイクも、今より派手だったかと思う。

全体的に、「女子大生」というやつだった。

そして、どちらかというと苦手なタイプだった。

はつきりした性格からくる言葉は無意識でも痛いところを突いてくるものだった。

だから、よくわからない。

彼女がなぜ俺を気に入ったのか。

卒業後も付き合いが続いているのか。

なぜ、俺がこんなに斎のことを気にかけなくてはならないのか。

斎の以前の職場の前を通り過ぎ、少し迷って彼女の家に行く。
無駄と思いつつインターフォンを鳴らすがいよいよ何の返事もない。
再び車に乗って、海の方へ向かう。

夕方近い海浜公園は母子連れの遊んでいる姿や、のんびりベンチに腰掛けている老人の姿、キャッチボールやらスケートやらで遊んでいる子供の姿で賑わっていて、翳り始めた陽光が穏やかで暖かかった。

斎はこの公園が好きだった。

気が向くところへ来て海を眺めているのだと言っていた。

自分自身のことを『水の民』だとか言う彼女にとって、この場所がどんな意味を持つのか、正直なところ俺には理解できない。

ただ、この高い空と上空に散らばる白い雲、くすんだ蒼い海、そして鈍い緑。この光景を愛せることは、少なくとも悪いことではないと思う。

ここで、ただ無言で沖を眺める彼女。

夜の満開の桜の下で明るく笑う彼女。

薄明かりの下でグラスを傾け夢現の言葉を紡ぐ彼女。

そのどれもが必ずしも愛しむものではない。

でもどれかが欠けて目の前から失せたとしたら、それはとても嫌だと思った。

無言で見通してくるような目も、突き放したような物言いも、やわらかなぬくもりも、それは既にこの世界から失われることは考えられないことだった。

「しょーがない、のか……………」

認めるのはどこか癪に障ったが、無視するのはやはり自分を偽っていると感じられた。

気が付くと陽はすっかり落ちていた。

急に肌寒さを感じて、俺は立ち上がった。

車を暖める間少し考えた。

それから車を駅に向けた。

菅田千尋（カンさん）の場合

Sの場合

一人であること、辛いことを再確認しに来ているようなものなのに、なぜ帰るときの気持はいつもこんなに楽なのだろうと思う。

夏っちゃんの笑顔。恵子さんのあったかい優しさ。心落ち着ける丘の上からの蒼い海の光景。風の湿り気。匂い。それら全てがあたしを包み、角を円くする。

離れて初めて知った地の縁の力。失って初めて知った人の優しさ、手の温もり。

血の縁など幻想であるが、血の通った人間の温度は人間を癒す最高の存在なのだと、知ることのできる時間と場所。

「結局、どんなに否定しても……………」

速く流れ過ぎて行く車窓の景色を眺めながら、あたしは呟いた。それから一つ大きなあくびをする。そのままぶたを閉じると、ずとんと意識が闇に落ちた。

たくさんのイメージが脳裏に浮かんでは流れてゆく。

知らない顔も知っている顔も、知らない場所も、馴染みの場所も忘れかけていた人も忘れようもなく近い人も、皆。でも固定したイメージには、どれもならなかった。断片がちらりと浮かぶのを捉えようとすると、また意識が裏返る感覚。

『夢』ではない。ただの「イメージ」の群像。それは結局何のインパクトもあたしに与えることはできなかった。

そのままあたしは下車駅まで一度も目覚めることはなかった。

駅舎を出ると、既に日はおちていた。見上げると遮るもののない

全き月。

明日は晴れそうだ。そう考えると、自然とあたしの口唇は笑みを浮かべていた。

視線を戻して、そこに立つ人に気が付く。

街灯の光を浴びて、じつとたたずむ人。

なんで。

言葉が出かかるが、咽喉の奥に留める。

馴染みのある彼の姿は見慣れない表情を浮かべてそこにあつて。

ああ、今、これは現実なのだなあと妙な実感を覚える。

おもむろに、ゆっくりと、近付いてくる。

目の前で、足を止めて。

見上げるとずいぶん不機嫌そうな顔が私を睨んでいる。

「お前は、ばかか」

沈黙を破る第一声にさすがに虚を突かれて、とっさに言葉を返せない。

「帰るぞ」

ただ瞬きして見上げている私の肩を叩くと、彼は　千尋さんは踵を返して歩き始めた。

意外なほどに熱くて優しい肩の感触に、ようやく私の金縛りが解ける。

「どうしたの」

追いかけて、隣に並ぶと、少しだけ不機嫌を解いた顔が振り向いた。

「送ってやる」

ぶっきらぼうで、愛想が欠けていて。

ああ、でも、帰ってきたんだなあ、と。

そんな実感が心に広がったのを感じていた。

NERVOUS
NOVEMBER

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7612c/>

NERVOUS NOVEMBER - 月下草シリーズ08 -

2010年10月20日10時34分発行